
† MARIA †

魅朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

†MARIAT†

【Nコード】

N5703D

【作者名】

魅朱

【あらすじ】

妖”アヤカシ”が見える僕は”マリア”と言われえる特殊な人間らしい。僕を守る騎士”チェン”の双子。飛鳥と疾風に出会う。ここから僕の日々は180°変わり始める。

出会い

梅雨時の6月中旬。

普通はこんな中途半端な時に転校生なんて来ないはずだ。

そう・・・普通は来ないはずだ。

なのに・・・なんで・・・。

僕は、古坂琴希（コサカ コトキ）。

女顔で身長だって小さいし、小柄すぎて困る。

体力だって平均、ごくごく普通の中学1年だ。

特技はピアノ。

困ってることが1つ・・・

この世のものじゃないものが見える。

俗に言う”幽霊”がみえる。

けれど、それでは何人か身の回りには居る。

僕は”幽霊”以外に妖（アヤカシ）と言われるものが見える。

妖は、人の嫉妬、恨み、悲しみ、怒り……。

人の感情のせいで生まれてしまう。

この妖のせいで、僕の友達や母さんは死んだ。

こんな考え事をしていたら急に背中を叩かれた。

「前、前を見なさい！！」

後ろの席の浅地が小さな声で呼びかけてきた。

「う、うん……。」

「今日は休みはないよな？よし！いきなりだが転入生を紹介する。」

「

野太い声で怒鳴ってるのは、真田先生。

女子からは”ダサ先”と言われているらしい。

まあ、僕は興味ないけど。

”転入生”って聞くとみんなテンションが上がるのか

なぜか盛り上がっている。

そこまで盛り上がる・・・？

「おい！入れ！」

入ってきたのは、髪の長い美少女と僕と同じ女顔の美少年。

「ほれ！自己紹介！」

美少女は渋々と低い声で自己紹介を始めた。

「ええ」と・・・初めまして。霧冥疾風です。よろしくお願いします
す・・・。」

霧冥疾風（キリミョウハヤテ）・・・。

変わった名前だな・・・。

次は美少年が声変わりをしてない高い声で自己紹介を始めた。

「初めまして。霧冥飛鳥です。よろしくお願いします。」

最後に満面の笑みを浮かべた。

霧冥飛鳥（キリミョウアスカ）と霧冥疾風（キリミョウハヤテ）・・・。

これが僕と飛鳥と疾風の出会いだった・・・。

告げる人

疾風「アンタ、妖が見えるでしょ？」

「えっ！」

飛鳥と疾風が転入してきた日。

僕は疾風&飛鳥に屋上に呼び出された。

そして・・・こんな展開に・・・。

ハァ・・・。まったく何なんだ？僕の人生は？

疾風「でも、珍しいわね。男の”マリア”なんて。」

「え？”マリア”ってなに・・・？」

飛鳥「え？」

疾風「ハァ・・・。」

僕が聞き返したら飛鳥君は驚いていて、

疾風さんには呆れられた。

飛鳥「あのさ・・・。古坂くん。マリアってのはね。」

疾風「マリアは妖、幽霊が見えると同時に”猊”を引き寄せるの。」

わかった？」

飛鳥「それで僕は……」

疾風「騎士”チェン”っ言うアンタを守るもの。」

「は、はあ……そ、そうですか。」

さっぱり分かん。

何？チェンって？

マリア？獺？

”ふざけんのも対外にしろ！！”と

二人に怒鳴りたかった。

疾風「まっそう言うことで。」

飛鳥「頭に少し入れといてね。あとね……。」

疾風「夜の学校には絶対入るな。」

飛鳥「入ったら永遠に出て来れない。」

「そう言うことだよ。」

二人は双子のように息がピッタリとそう言った。

そう言い残すと二人は屋上を後にして言った。

「何……。あの二人……。」

”マリア”……。

きつとこれは僕の……。僕たちの逃げられない定めなんだろう……。

この時を境に僕らの運命は180°変わり始めた。

告げる人（後書き）

飛鳥&疾風は何者なのかは次回で分かるはず・・・。

飛鳥と疾風。

「どうしよう・・・。」

ヤバイ・・・ヤバイよ・・・。

学校に宿題を忘れた・・・。

今の時刻は午前2時。

簡単に言えば「丑三つ時」ってやつ。

だからと言って先生に『すいませ〜ん：宿題忘れました』なんて言ったら・・・。

ああ〜数学の岡田センセに笑顔で殺される〜（ ; ）！！

「学校に忍び込むか・・・」

これがTV番組だったら画面下に「よい子は真似しないでネ!」って出てるんだろうな〜。

なんて思いながらじめじめした空気の中を自転車で走っていく。

この後に起こることも知らずに・・・

カツカツカツと上履きで夜の学校へ進入。

バレたら完全校長室行きだ・・・。

「サツサと宿題持って帰る・・・。」

教室に向かうべく足を速めたそのとたん・・・

後ろに気配が・・・。

この気配・・・妖や霊のものだ・・・。

覚悟を決めて後ろを振り向くと・・・。

ドロツとしたものの姿があつた・・・。

僕に覆いかぶさってくる！！

ヤバイ！！

「伏せる！！琴希！」と伊勢のいい声のが叫ぶ。

声は分からないけど、言う通りにしてみた・・・。

助かるために・・・。

バンバン！と銃声が聞こえ・・・。

「き・・・くん・・・こ・・・と・・・琴希君？」

目を覚ました僕の前には飛鳥&疾風の姿があつた。

「な・・・なんで・・・？」

「何でってアンタを守る為でしょうが。」

「あれ・・・僕。自己紹介した？」

だって転入して1日目だし、屋上で話した時は“あんた”だったのに…………。

『そんなの調べた。』 あつ。 またハモった。 何？双子…………じゃないよね。

顔、全く違うし。

「2人はどんな関係なの？恋人同士？」

助けて貰ったのにこんな事言うのは…………ダメなんだろう。

でも………… かなり気になるんだよオオオオ！！！！

カチャ。と銃が僕の頭に当てられる。

「あれゝ？此処にバカがいるよ。こう言う人は“殺さなくちゃ”ね。」

「言わねえゝよ！！しかも殺そうとするな！！！」

「おおゝ。 琴希君、ナイスツッコミ！！！」

飛鳥君が驚き、疾風さんが拍手する。

「で、お2人の関係は？」

「僕らはねえ……」

「飛鳥。勿体ぶらんでいい。」

「エヘヘ。簡単に言つと」

「『双子』だよ」

双子

「エッ……（絶句）」

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だアアアアアアア！……！！

だって！だって！

飛鳥君は男だし、疾風さんは女だし！！

「信じられないみたいね……。」

「そりゃそうだよ……。」

「エッ……嘘はいかんよ。お二人さん。」

「アンタ、見事に信じてないわね。」

そりゃ信じないさ……！！

顔は少し似てるなとは思うけど性格が正反対だし、もう絶対双子じゃないよ……！！

「琴希君、”二卵性双生児”って知ってる？」

「うん。聞いたことはある。」

「あたしらはそれ。」

「証拠を見せる前に」

「『あれ』を消しちゃおうぜ。」

疾風さんがニヤリと笑う背後では黒い陰が蠢いていた。

「アレ、水属性だね。」

飛鳥君がポツリと呟く。

「嗚呼、面倒な奴と当たっちゃった。」

「どうする？琥塔君居ないよ。」

ん？琥塔君？？

「まあな。頑張るしかねえくдар。」

「ちょっと待って！」

「何よ！サッサと言って！」

「琥塔君って……琥塔鈴架さん？」

「知ってんの？」

「ええ」と……その……

琥塔鈴架さんとは僕の先輩に当たる生徒会長さん……

ちなみに男……。

「何か、僕を読んだかな？」

朝の朝会で聴き慣れている生徒会長さんの声が背後で聞こえた。

「ありゃく……噂をすると……。」

「てかなんでいるんですかあ？」

と同時に質問する飛鳥君&疾風さん。

こう言うところが双子みたい……。

「疾風、飛鳥。1人ずつ話せ。」

「ええー!!」と二人してブーイング。

「じゃあ僕からいいまゝす!!」飛鳥君の声だし、飛鳥君の口調だった。

「あたしからじゃだめ？」これは疾風さんの声だったし、疾風さんの口調。

だけど琥塔さんが言ったのは

「君ら、こう言うときに互いの声真似と口調を真似るな。」

「エッ!?!」

「どうやらこの二人は……」

「あらら……。ダメだったのかな？」

「いいじゃん。別に。」

「君達、いい加減にしなさい！」

「どういふことですか？？」

床にぺたりと座っている僕のところ

疾風さんが歩いてきて、僕の肩に手を置きながら

僕の前に跪く。

「こう言うことだよ。琴希君。」飛鳥君の口調&声でニコリと微笑むのは

間違えなく疾風さんだった。

「そうそう。」

今度は飛鳥君が歩いてきて、疾風さん声&口調で言う。

「…………ええ………………!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703d/>

† MARIA †

2010年12月24日14時26分発行